

防衛事務次官挨拶

ご紹介いただきました防衛事務次官の江間でございます。このような公開の安全保障国際シンポジウムをグランドヒル市ヶ谷で開催いたしますのは初めての試みです。本日、こうして御挨拶させていただく機会をお借りしまして、安定した安全保障環境構築へ向けた防衛庁・自衛隊の最近の取組みの現状からお話をしたいと思います。

（日米安保体制と安定した安全保障環境構築への努力）

我が国の平和と安定を確保するためには、適切な防衛力の保持と日米安保体制の堅持が必要ですが、その一方で、安全保障対話・防衛交流を通じて諸国間の信頼形成を進め、国連などの軍備管理・軍縮に協力し、平和で安定した安全保障環境を創造していくことが重要です。このような考えの下、21世紀に向けての我が国の防衛力のあり方を示した防衛計画の大綱におきましては、より安定した安全保障環境の構築への貢献を防衛力の役割の一つとして位置づけており、防衛庁・自衛隊は、日米間の緊密な協力関係を基盤としつつ、国際社会の安定化に向けてアジア太平洋地域諸国との防衛交流や安全保障対話を積極的に行っております。

アジア太平洋地域におきましては、欧州における軍備管理・軍縮などのような地域の安定化に向けた動きこそ見られませんが、近年、この地域の政治・安全保障に対する関心が高まり、二国間の防衛交流が増加し、多国間の対話の努力が行われるようになっております。

（二国間防衛交流の進展）

二国間防衛交流につきまして、特に我が国と中国及びロシアとの防衛交流が活発化していることにふれたいと思います。

中国はアジア太平洋地域において大きな影響力を持っており、防衛分野での相互理解を深め、信頼関係を増進することは、両国間の安全保障のみならず、この地域全体の平和と安定に資するものであります。

近年、日中両国首脳相互訪問に見られる両国関係全般の進展を背景に、昨年、中国国防部長と防衛庁長官の相互訪問が実現するなど、ハイレベルの防衛交流が進展しております。また、防衛当局者間の定期協議も着実な実績を積み上げております。本

日のシンポジウムを主催する防衛研究所に関して申し上げますなら、昨年2月、遅浩田国防部長が来日された際、防衛研究所において「中国の国防政策」と題して講演が行われ、防衛研究所の研究者や研修生との間で熱心な質疑応答がなされました。そして、防衛首脳会談におきまして、防衛研究所と中国国防大学との間の防衛研究交流の促進を図ることで合意がなされました。これにより、今後、防衛研究所と中国国防大学はお互いにカウンターパートとしての関係を深めることになり、研究者の立場で日中間のみならず、地域安全保障のための研究交流を進めることが期待されております。

さて、ロシアでございますが、冷戦終結後ソ連が崩壊し、その後、政治や経済の改革が進む中で、日露両国の関係は改善されています。ロシアは我が国に隣接した国であり、防衛交流を深め信頼醸成を図っていくことは極めて重要であります。防衛庁・自衛隊としましては、日露関係全般の進展の中で、着実にロシアとの防衛交流を進めていきたいと考えております。1996年に、防衛庁長官がソ連時代を含めて初めてロシアを訪問し、その翌年の1997年にはロシア国防相が初めて日本を訪問しました。また昨年、防衛事務次官がロシアを訪問し、ロシア国防相と会談し、防衛庁幹部として初めて極東ロシア軍を視察しました。会談においては、地域の主要国である日米中露4カ国対話に向けた議論を進めることで意見の一致が見られました。さらに昨年、制服組のトップである統合幕僚会議議長とロシア軍参謀総長の相互訪問も実現しました。防衛当局者間の定期協議も、局長・審議官級協議、課長級の共同作業グループなど着実に進んでおります。防衛研究所は、ロシア軍参謀本部軍事戦略研究センターなどロシア国防省関係研究機関との間で、研究者の立場で意見交換を行う日露防衛研究交流を実施しております。この研究交流は1993年に開始し、これまで10回の実績を重ねてまいりました。

以上、中国、ロシアとの防衛交流につきお話を申し上げましたが、お隣の韓国との防衛交流も北東アジアの平和と安定のために極めて重要です。1994年以降は、日韓両国防衛首脳が毎年交互にそれぞれの国を訪問し、会談が開かれているところであり、つい先週も野呂田防衛庁長官が韓国を訪問し、防衛首脳会談が行われました。この会談では、核兵器開発疑惑、弾道ミサイル開発の動きのある北朝鮮情勢について意見交換を行ったほか、昨年12月に発生した北朝鮮の半潜水艇侵入事案のような緊急事案が発生した場合における日韓防衛当局者間の緊密な連絡体制を確保するため、その具体的な検討を行うことで合意したところであります。また、審議官級の日韓防衛実務者対話など、防衛当局者間の定期協議が開かれるとともに、防衛研究所も韓国国防大学院等との防衛研究交流を進めています。

本日のシンポジウムでシンガポールからチン先生がお見えですが、シンガポールを

はじめ東南アジア諸国との防衛交流、オーストラリアやカナダ、欧州諸国との防衛交流もそれぞれ進展しております。

(多国間安全保障対話の試み)

ところで、多国間の安全保障対話であります。アジア太平洋地域の多国間の対話の努力として ASEAN 地域フォーラム (ARF) が重要です。ARF は、現状では、欧州において見られるような地域的な安全保障枠組とは未だ言い難いのですが、アジア太平洋地域における唯一の全域的な政治・安全保障対話の場であるという意味において貴重なものであります。1994 年以来、これまで 5 回の閣僚会合が開かれ、その活動の裾野を広げつつ着実に進展しております。防衛庁・自衛隊は、この ARF のプロセスに積極的に関与しております。ARF のプロセスには、ARF・SOM と呼ばれる高級事務レベル会合のほか、信頼醸成措置について包括的に検討する ARF・信頼醸成インターセッションナルサポートグループ、搜索救難や PKO など個々の具体的信頼醸成措置について協議する ARF・インターセッションナル会合などがありますが、これらの活動に参画しております。特に 1995 年の第 2 回 ARF・SOM において、我が国は域内における軍備や防衛政策の透明性向上のために、我が国の防衛政策について記述した文書を提示して、各国も同様の対応をとるよう提案いたしました。この提案は幸いに参加各国の理解が得られて合意され、アジア太平洋地域の信頼醸成のための貴重な一歩を記したものと思っております。

ARF だけではありません。私ども防衛庁・自衛隊も自ら主催者となって、多彩な対話の機会を設けております。

まず、政策当局者レベルの多国間安保対話の場として、アジア・太平洋地域防衛当局者フォーラムを主催しております。昨年 10 月には、我が国を含む 20 カ国と一機関のオブザーバー参加を得て、国防政策担当局長・局次長クラスが地域の安全保障に関し直接対話を行う、第 3 回目のフォーラムを開催いたしました。このフォーラムは、冷戦終結後のアジア太平洋地域における多国間の安全保障対話の重要性、特に地域の信頼醸成に関し各国の国防当局の果たすべき役割の重要性につき共通認識を得る上で重要な役割を果たしております。

また陸・海・空の各自衛隊もそれぞれ積極的に多国間の会議やセミナーを主催しております。防衛研究所もアジア・太平洋諸国安全保障セミナーを過去 5 回開催するとともに、東南アジア諸国とも、毎年、各国の安全保障問題の専門家を一堂に招聘し、研究会を開催いたしております。

防衛研究所の場合、研究機関という性格上、二国間、多国間を問わず、そこでの対

話は研究者としての立場からのものであり、それだけ客観的かつ自由な意見交換を行うことができ、そのような対話を通じて、交流相手国との相互理解を深めつつ、豊かな構想力に基づくアイデアがもたらされる可能性があります。

本日、防衛研究所が主催して開催するシンポジウムは関係国から一流の研究者をお招きし、個人の資格で学術的な観点から報告発表や議論を行うものであります。アメリカからベッツ先生、中国から羅先生、ロシアからクレメニユク先生、シンガポールからチン先生、そして日本からは大阪大学の星野先生をお招きし、これから報告と議論が行われることでしょう。また明日、アメリカのナイ先生の基調講演が行われる予定になっております。ご参加の先生はそれぞれの御専門の角度から議論をなされることと思いますが、この対話を通じ、将来の北東アジアの平和と安定のための創造的な構想が生み出されることを期待しております。

(地域の多国間安全保障枠組を目ざして)

ところで、本日のシンポジウムのテーマは「21世紀初頭の北東アジアの戦略環境」であります。現在の地域情勢の推移に照らして、このテーマは時宜にかなったものと言えましょう。

アジア太平洋地域は世界的な影響力を持つ米国、中国、ロシア、そして経済大国である日本が隣接しあっている地域であり、世界のどこを見てもこのような地域は他には見られません。

冷戦終結後から今日に至るまで、この地域でもっとも進展したことは、地域安全保障に大きな影響力を持つ日米中露主要国の間の二国間関係が大きく改善したことでありましょう。1994年以降、これら諸国の間で相次いで開催された二国間首脳会談は注目に値するものです。防衛交流の面におきましても、米中間では1996年以来、軍事交流の機会が増大し、アメリカ国防長官と中国国防部長の相互訪問、米統合参謀本部議長と中国参謀総長の相互訪問など防衛首脳間の交流が活発化しております。中露間では、1996年に両国首脳間で「戦略的パートナーシップ」の発展につき合意がなされ、中国側から国防部長、ロシア側から国防相など、両国の軍最高幹部の相互交流が活発になされております。我が国も先ほど私がお話し申し上げましたように中露との防衛交流が活発化しております。

このようにこの地域の主要国の間で二国間の交流が進展したことは、大いに歓迎すべきことであります。けれども、二国間関係の進展は必ずしも、安定した多国間関係の構築が直ちに進むことを意味しません。そして、ここ北東アジアにおきましては、多国間の安全保障枠組だけではなく、主要国の多国間対話についてもほとん

どなされたことはないのです。

二国間の対話を通じて培われた信頼関係は多国間の安全保障対話を進展させる際の基礎になり得ることは認められますが、それに代わることはできません。多国間の安全保障対話は、複数の国家からの出席者が一堂に会して、共通の安全保障問題についての意見交換や協議を通じて地域全体の信頼関係の増進を図るものであります。多国間の安全保障対話は言うなれば、地域の安全保障に関する公共空間を作る試みであり、この点に二国間対話とは異なる独自の意義があると申せましょう。

私どもは、アジア太平洋地域の平和と安定を支える国際公共財としての日米安保体制を基盤にしつつ、多国間の安全保障対話を進め、関係諸国すべてが安全を享受する協調的な安全保障枠組を構築すべきと思います。そのために、何が北東アジアの問題であるのか、地域の安全保障枠組として関係諸国がそれぞれどのようなものが望ましいと考えているのか等、さまざまな点をはっきりさせるべきでしょう。

本日から明日にかけてのシンポジウムで北東アジアの戦略環境につき、学術的な観点から検討が行われることでありましょう。この検討を通じて、地域の多国間安全保障枠組のための将来ビジョンにつき、本日お越しいただきました皆様をはじめ、広く内外の議論を触発し、そこからコンセンサスを形成することができましたら、と切に願っております。

本シンポジウムの成功を心から祈って、私の挨拶とさせていただきます。

平成 11 年 1 月 13 日
防衛事務次官
江間 清二